

# 秋の叙勲 受章者を紹介

秋の叙勲で受章した4人について、その人柄、現役時代の思い出や仕事において信条としていたことなどを紹介します。また、各受章者に贈られた勲章も紹介しています。

インタビュ어의様子は、町情報番組「やほラヂー！」（ラヂオ・もりおかFM76.9）で12月中旬に放送する予定です。

## 科学技術振興に志 県勢発展に貢献



瑞宝小綬章  
古澤眞作さん  
(元・県理事)  
高田2区



兵庫県出身の古澤さんは昭和47年、24歳のときに当時勤めていた東京の会社を退職し、岩手県へ。その年の11月に県庁へ入庁し、県勢発展に尽力しました。

『遠野物語』（柳田國男）や宮澤賢治作品を読む中で魅力を感じ、岩手に来た。当時、岩手は近代化、工業化、地方の発展への動きがあった。中央に負けないよう、岩手の発展に向けて、地域に密着した形で貢献できないかと考え、頑張ってきた」と公務における信条を語りました。

職員時代は、県理事として

て県立大学の運営などに携わった他、花巻地方振興局（現在は県南広域振興局に統合）の局長などを務めました。特に、印象に残っている仕事として、県企画調整課時代の科学技術分野に係る振興を挙げました。

古澤さんは「今いわれているILC（国際リニアコライダー）について、その最初の仕事に関わることができた。岩手で、科学技術の先端をいくようなものが取り生まれ、それが地域の発展につながっていけば」と話し、これからの県政へ期待を寄せました。

## 生徒と心通わせて 教育振興に寄与



瑞宝小綬章  
吉田芳英さん  
(元・公立高校長)  
南矢幅2区



町内出身、在住の吉田さんは、昭和48年に工業系の専門科目の教師として教壇に立ちました。授業はもちろん、生徒へのケアにも力を入れ、どんな生徒にも心を寄り添わせた指導に取り組みました。

複数の高校で校長を務めた他、県教育委員会などにも長く従事。そのため、実際に教鞭を取り、生徒らと関わった時間一つ一つが大切な思い出として、残っています。

中には、今も年賀状でやり取りが続いている生徒もおり「結婚したり子どもが

生まれたり、その子どもが結婚したりなど、近況を伝えてくれることがうれし」と顔をほころばせます。

教育現場における課題が多様化する中で、吉田さんは「生徒への指導そのものが難しい時代。教師の体罰や深刻化するいじめなど、教師と生徒が関わっていく中で、多くのことに気を配らなければならない。大変さはあると思うが、生徒一人一人に気を配り、困難を乗り越えて教えるが無事に、卒業していく姿を見送ってほしい」と行進へエールを送りました。

## 勲章の種類と 授与対象

<b>大勲位菊花章</b>		旭日大綬章、瑞宝大綬章を授与されるべき功労より優れた功労がある方
<b>桐花大綬章</b>		
<b>旭日章</b>	<b>瑞宝章</b>	<b>旭日章</b> —功績の内容に着目し、顕著な功績を上げた方 <b>瑞宝章</b> —公務などに長年にわたり従事し成績を挙げた方 それぞれに大綬章、重光章、中綬章、小綬章、双光章、単光章があります。
<b>文化勲章</b>		文化の発達に関し、特に顕著な功績のある方

※この他、外国人や女性のみにも贈られるものなどがあります。

### 医師の信頼厚く 県内の医療に献身

平泉町出身の山本さんは昭和40年に大学を卒業後、診療放射線技師として県内の医療機関で仕事を始めました。「その翌年ころから、

CT機器が医療現場に導入され始め、その後、MRIなども使用され始めた。医療の進歩は昔も今も激しいが、その中でも、しっかりとそういった機器に対応できるように、努力を続けた」と話します。

医師の問診や触診、血液検査など、多様な診療方法がある中で、医療機器による精密検査も正確な診断を行うための手段の一つ。山

本さんは県立中央病院をはじめ、磐井、久慈、北上(現・中部)など県内各地の県立病院で、技師や技師長として、多くの機器を駆使し医療現場を支えました。

山本さんは「神経以外のさまざまな体の様子を知ることができ、医師も機器による診断結果を頼りにしてくれる。医師が患者のことをより詳しく診て、どんな状態かを確認できるように、医師の補助的な仕事だが、診断の役に立つ仕事をしようという心掛けを持ち、50

年、続けてきた」と仕事に懸けた思いを語りました。



**瑞宝双光章**

**山本 優次さん**

(元・県立中央病院診療放射線技師長)

西徳田1区

### 顧客の幸せが第一 配置薬普及に尽力

富山県出身の大橋さんは昭和41年、勤めていた配置薬の販売会社からの出向で岩手県へ。当時、配置薬の普及が進んでいなかった本

県を含め、東北各地をめぐる、最前線に立って開拓を進めました。さらに、県医薬品配置協議会長を平成21年3月～31年3月までの10年間勤めて、医薬品配置を通じた県内の保健衛生水準の向上に貢献しました。

「薬というと、医者から処方されるもの、薬局で買うもの、そして配置薬がある。それぞれ役割があるが、配置薬は(家庭内に準備さ

れていて)誰でも安心して飲めるもの。薬は飲み方によって、毒にも良薬にもなる。そのため、薬や病気に関しても、定期的に行われる研修などで勉強を重ねてきた」と話しました。

配置薬を販売する中で、顧客の子どもが結婚するなど、各家庭の暮らしに長く関わる場合も多く、大橋さんは「もうけが全てではない。各家庭の幸せや健康を願う仕事をさせていたたく、そういう気持ちで仕事を続けてきた」と語り、配置薬の浸透に奮闘した日々を振り返りました。



**旭日双光章**

**大橋 長良さん**

(元・県医薬品配置協議会長)

広宮沢2区